

新しい「移住」のかたち

—1990年代以降の沖縄への移住を事例として—

須藤直子

1. はじめに

1-1. 本稿の目的

本稿は、1990年代以降の沖縄県外出身者による沖縄への移住を事例として、現代の新しい「移住」のあり方について論じるものである。

1990年代以降、海外に長期滞在する日本人の増加とともに⁽¹⁾、これまでの日本人にはあまり見られなかった移住が現れた。それは、従来の海外移民のように、新天地に就労機会を求める移住や、企業の駐在員としての移住では説明できない移住である。例えば、香港に活躍の場を求める日本人女性（酒井 2000）や、パリへ移り住む日本人（山下 1996；吉原 2008）の移住が挙げられる。このような現代における日本人の海外移住の特徴は、山下や吉原らによって「ライフスタイル移民」として概念化された⁽²⁾。

その一方で、日本国内での都道府県間の移動率は、1960年代から70年代をピークに、年々低下している⁽³⁾。この現象は、海外に長期滞在する日本人の増加傾向とは相反する現象である。しかし、沖縄県においては、上記のような日本国内の移動率の低下が当てはまらなかった。すなわち、沖縄では1998年から2005年までの8年間、県外からの転入超過が続いたのである（以下、図1）⁽⁴⁾。この時期は、沖縄の文化や風土が沖縄県外から注目され、次々と消費されていった時期である。その様子は「沖縄ブーム」と称されてきた⁽⁵⁾。さらに、この沖縄ブームを背景にして、「沖縄へ移り住みたい」と考える沖縄県外出身者が続出し、「沖縄移住」という用語が登場した⁽⁶⁾。つまり、1990年代後半から8年間沖縄に見られた転入超過の持続は、この「沖縄移住」のインパクトを少なからず受けたと推察できる。

確かに、1990年代以前から沖縄県外出身者は沖縄へ移り住んできたため、沖縄県外出身者が沖縄へ移り住むことは新しい現象ではない⁽⁷⁾。しかし、1990年代以降の沖縄への移住は、沖縄ブームや沖縄観光との接点から説明できるという点で、従来の移住には見られない新しい現象として捉えることができる。例えば、多田治は「マス・ツーリズム型の駆け足観光では物足りない」人々が、半年に一度沖縄にロングステイをしたり、沖縄の安宿に長期で滞在したりするようになることで、観光と移住とがなだらかにつながるようになったと述べる（多田 2008：234-235）。ま

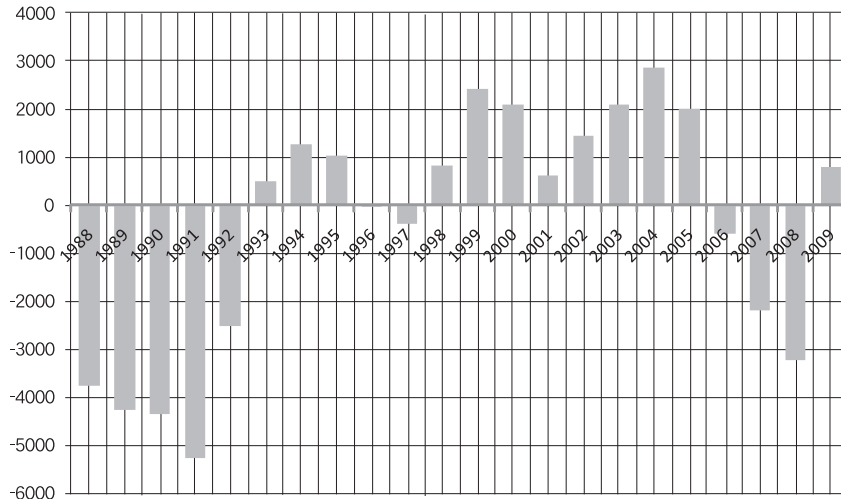


図1 沖縄県の転入超過数の推移（1988年～2009年）

た、秋山道宏も「従来、移動の側にあると見られてきた観光は、移動性の高まりによる観光の延長としての移住という現象の出現によって、住まい方・居住のあり方と密接に関連してきている」と述べる。そして、沖縄への移住を「住む観光としての移住」として説明している（秋山2009：61-63）。すなわち、1990年代以降の沖縄県外出身者による移住のあり方は、近年の沖縄ブームと沖縄観光のあり方を反映しているのである。

しかし、1990年代以降の沖縄への移住を、沖縄ブームや沖縄観光との接点からだけ理解することは困難である。なぜなら、大量の沖縄県外出身者が沖縄へ移住する背景は、沖縄ブームや沖縄観光という一元的な要素に回収できるほど同質的ではないからである。そこで、本稿では、1990年代以降の沖縄への移住を、アルジュン・アパデュライによる「エスノスケープ」の概念を手がかりにして考察してみたい。アパデュライは、近年の世界規模による人の流動を「エスノスケープ」と表現し、以下のように説明している。

《エスノスケープ》とは、今日の変転する世界を構成している諸個人のランドスケープを言い表している。つまり、旅行者、移民、難民、亡命者、外国人労働者といった移動する集団や個人が、世界の本質的な特徴をなしており、国家の（そして国家間の）政治に、これまでにない規模で影響を及ぼしているようである。とはいえ、親族、友人関係、労働や余暇から、子供の誕生や居住といった世代を超えるものにいたるまで、比較的安定した共同体やネットワークが存在していないわけではない。だが、こうした安定性がいわば縦糸として存在しているとしても、移動しなければならぬ現実や、移動への欲求をかきたてる夢想到に直面する個人や集団が増えるにしたがい、いたるところで、あたかも横糸のようにヒトの移動が入り交じっている

とは言えるであろう（Appadurai 1991=2004：70-71）。

アパデュライは、旅行者や移民等の「移動する集団や個人」が世界的な特徴をなしているとして述べる中で、従来のさまざまな共同体やネットワークが「縦糸」として存在し、そこに「横糸」として人の移動が入り交じっていると述べる。このアパデュライの縦糸と横糸の説明を借りるならば、1990年代以降の沖縄への移住は、横糸の移動として理解できる。さらに、先に取り上げたライフスタイル移民も、この横糸の移動である。

そして、アパデュライが述べるこの横糸の移動の特徴は、「移動しなければならない現実や、移動への欲求をかきたてる夢に直面する個人や集団」が増えていることを背景にしている、という点である。すなわち、1990年代以降の沖縄への移住を理解する手がかりは、この「移動への欲求をかきたてる」ものにあるのではないか。言い換えれば、沖縄へ移住することを選択するという欲求に、移住者たちをかきたてたものは何だったのか、ということである。

以上のような問題意識から、本稿は、1990年代以降の沖縄への移住を事例として、移動への欲求をかきたてられることで成立する横糸の移動、つまり新しい「移住」のあり方を明らかにすることを目的とする。

1-2. 方法とデータ

本稿の研究方法と用いるデータについて示しておく。まず、1990年代以降の沖縄への移住が、これまでに見られない新しい「移住」であるという根拠を示すことが必要である。そこで、第2節では従来の移住がどのような移住であったのかを概観する。その上で、新しい「移住」のかたちの一つのバージョンとして立ちあがってきたライフスタイル移民と、自発的な地域選択という観点から論じられる日本国内におけるIターン⁽⁸⁾を取り上げる。

次に、第3節と第4節では、筆者が2008年に沖縄移住者を対象にして行ったインタビュー調査を用いて、1990年代以降の沖縄への移住を分析する。筆者は2008年の5月から7月まで、沖縄本島全域と石垣市にて17名を対象にインタビュー調査を行った。対象者は20代から50代の沖縄県外出身の男女である。彼らは、1990年以降に、沖縄ブームや沖縄観光から説明される「沖縄移住」という用語が成立する中で、沖縄県外から移住してきた⁽⁹⁾。本稿で取り上げる対象者の人数は限られているが、彼らの語りを詳細に検討することで、現代の「移住」のかたちがどのような様相を呈しているのか、というその特徴の一端を示すことが可能である。移住者の語りを引用しながら、移住の目的や移住の選択の背景を描き出し、沖縄への移住を選択するという欲求に、移住者たちをかきたてたものは何だったのかを探る。

2. 従来の移住とライフスタイル移民

2-1. 従来の移住

これまで社会学は、人の地理的な移動と併せて、職業移動や階層移動という社会移動にも大きな関心を払ってきた。蘭由岐子は、野尻重雄の農村研究が人の地理的な移動には人々の社会的な地位の変動が必ず存在する、という認識を前提にしていたことを指摘することで、人の地理的移動と、それに伴う社会移動の変化の両方を見る必要性を説いている（蘭 1994）。

1920年代以降、都市化に伴って人々の地理的な移動が盛んに行われ、就労機会を求めて都市へ流入する人々の存在は、社会学の大きな研究テーマであった。例えばタマラ・K・ハレーブンは、アメリカへの移民たちが家族や親族のネットワークを戦略的に用いて移住を行う、連鎖移住（chain-migration）のあり方を詳細に描き出している（Hareven 1982=1990）。また、日本においても農村から都市への移動パターンが主流であった戦後から高度経済成長期にかけて、都市に流入した人々で形成する同郷団体や郷友会の存在が、連鎖移住を促したり、移住者を定住へとつなぎとめる機能を果たしていたことが指摘されている（鯉坂 2008：66）。すなわち、都市に就労機会を求める人々の移動が、従来の人の地理的移動の根幹をなすものであった。そのため、この主流の移動パターンからは「逆流」とみなされる都市から農村への移住は、一部の人々による例外的なものとして捉えられていた⁽¹⁰⁾。

2-2. 現代日本におけるライフスタイル移民

農村から都市への移住が人の地理的移動の主流であった時代を経て、次第に人々はさまざまな方向へ、またさまざまな目的で移住するようになる。その一つの例が1990年代以降の日本人の海外移住についてであり、前述したライフスタイル移民である。

島村麻里によれば、ライフスタイル移民とは団塊の世代による留学などを含む、語学や習い事といった趣味を優先することで海外移住を選択する人々である（島村 2007：96-98）。パリに住む日本人を分析する吉原直樹は、彼らの特徴を「他の国とか地域でみられるような日本企業の海外進出と直接にむすびついた移住者（『企業移民』）」ではなく、「中高年女性とか定年退職者を担い手とする『ライフスタイル移民』」であると述べている（吉原 2008：204）。そして、ライフスタイル移民は「古典的な移民という枠ではとらえられず、もう一つの人生を求めるタイプ」の移住である（山下 2007：8-9）⁽¹¹⁾。

以上のようなライフスタイル移民の登場によって、吉原は「領域とか境界にしばられない新種の移住形態とか移民スタイルが台頭している」と述べる。そして、「それとともに流動性とか脱統合をキーワードとするような日本人社会が出現しつつあることに留意しておく必要があるだろう」と述べている（吉原 2008：220）。すなわち、ライフスタイル移民は、就労機会を求めて海

外へ移住していった従来の移民たちや、その後の日本企業の海外進出に伴う駐在員やその家族たちの移住経験とは同じ文脈で語るができない。ライフスタイル移民の特徴は、何よりも移住の動機が趣味の優先や、「もう一つの人生」を送ることを求めるという点にある。

2-3. 日本国内におけるIターン移住

では、本稿の冒頭で前述した通り、日本国内における都道府県間の移動率が年々減少傾向にある中で、現代の日本国内における日本人の移住はどのような様相を呈しているのだろうか。本項で取り上げるのは、1989年に長野県によって打ち出されたIターンという用語とともに、次第にクローズアップされてきた自発的な地域選択を行う日本国内での移住である。

これまで、都市から農村への移動が例外的な「逆流」の移動であるとされた時代には、農村へ移り住むことはカウンターカルチャーという文脈を引きずっていた⁽¹²⁾。しかし、菅康弘によれば、逆流の移住がIターンとして示される過程において、次第にその逆流の移住は農村への移住に限ったものではなくなる。Iターンは〈田舎〉言説によって語り尽くせるものではなくなったのである⁽¹³⁾。菅は「①係累のない土地を②自発的に選択するという、Iターンのもつ〈移住〉という側面を重視する」ことで、Iターンの現代的な特徴を指摘する（菅 2006：8）。そのIターンの特徴は、移住先（居住先）を自発的に選択することによって、「選び取ることによる愛着」が獲得される、というものである。これまでの移住は、その土地へ定着するかどうかという意識が問題になってきたが、現代のIターンは「肩肘張った『骨を埋める』覚悟の移住でもなく、地域から隔絶し独自の生活や共同体を追及する移住でもない」（同上、2006：16-17）。すなわち、移住者自身が「自発的に居住地を選び取った」という意識によって移住が成立するのである。

以上のように、現代のIターンは、ライフスタイル移民と同様に従来の移住の方向や形態、また労働力移動による移住として捉えることのできない新しい「移住」である。そして、自発性や愛着という用語で説明されるように、主体的に居住地を選択するという特徴を持つ。しかし、その移住が選択される背景、すなわち新しい「移住」へと移住者をかきたてる背景はまだ明らかになっていない。そこで、いよいよ次節より1990年代以降の沖縄への移住を具体的に検討していく。

3. 変化の手段としての「移住」

本章より、1990年代以降に沖縄へ移住する県外出身者たちが、一体何に突き動かされ、そして沖縄への移住へとかきたてられていったのかを見ていく。まず、沖縄への移住を生き方や自己の変化を可能にするための手段として捉えていた3名の移住者を検討する。

3-1. 生活や生き方を転換する

本項では、沖縄へ移住する以前の都市での生活に大きな疑問を抱き、その生活や生き方を大き

く変化させることになったFさんとPさんを取り上げる。

Fさん（1966年出生、40代、女性）は、沖縄本島北部で有機農業を営んでいる。東北地方で生まれ育ち、高校を卒業後東京で仕事をしていた。しかし、20代で母親を亡くしたことを機に、食の問題に強く関心を抱くようになる。その経緯について、「毎日食べてるものとかも、疑問を感じたりとか。色んなことに疑問を感じ始めて」と述べている。その後、Fさんは自然食品を扱う会社に勤めたり、埼玉県内で有機農業の研修を受けたりと、無農薬の食物を生産することに強く関わっていく。その研修で、現在の夫（Xさん）と出会う。

Fさんは、少しずつ農業に関わり始める中で、沖縄県の西表島でさとうきびの収穫を手伝う機会に恵まれる。1998年の31歳のときである。Fさんは、このとき初めて沖縄を訪れた。この当時について、Fさんはまだ「沖縄で何かしようとかってというのはそのときは全くな」かったと回想する。

しかし、その後Fさんは再び沖縄を訪れる機会があり、本島北部ですでに農業を始めていたXさんと再会する。この再会を契機に、Fさんは沖縄で農業を営むことを具体的に考え始める。Fさんは夫の生き方やスタンスについて、以下のように語っている。

F：夫の方も…自分で沖縄に住みたいって…あのう、沖縄で畑するって言ってたけれど…そういう憧れとかではなく、やっぱり夫の方がさらに、もう…あのう、何て言うんですか。日本と沖縄の関係であったり、自分が日本に住んでて、すごい沖縄を搾取してきたから、自分は搾取するような生き方はしたくないっていうような感じで。そういう…搾取しない、生き方を沖縄でしたいって思いで来たらしい。

Fさんは、沖縄でXさんと再会したことがきっかけで、沖縄で農業を始めることを決意する。上記の語りからもわかるように、その決断にはXさんの価値観や生き方から大きな影響を受けたことが関係していた。20代半ばで食について疑問を抱きはじめ、それが有機農業を営むことへと結びついていったFさんが、実際に沖縄での就農を決意する過程には、夫の存在が重要であったのである。

こうしてFさんは、2000年の33歳のときに沖縄で暮らし始め、Xさんと結婚する。Fさんは、東京で勤めていた時代を「サラリーマンじゃないけども、ホントに時間時間で仕事したりとかって生活だった」と述べ、「タイムカード押して、仕事して、押して帰ってって生活」だったと語る。それは、「自分で使いやすい、無理ない時間の使い方」をできる現在の沖縄での生活とは対置される時間感覚である。しかし、「お給料もらえないから自分で、（野菜や果物を）なんとか作って、加工品作って」という沖縄での現在の生活は、「頑張りすぎて、ちょっとダウン気味」になるほど厳しい生活でもある。

次に、夫の転勤によって現在石垣市で暮らしているPさん（1970年出生、30代、女性）を取り上げよう。Pさんは未婚のころに仕事をやめて、竹富島に移り住んだという経験を持っている。Pさんは九州地方で生まれ育ち、短大を卒業したあと、東京や福岡の都市部で洋服の販売の仕事をしてきた。20代の終わりに親戚の結婚式で沖縄を訪れ、沖縄の音楽に触れたことでPさんは「沖縄に目覚め」る。それから福岡にある三線教室に通うなど、沖縄の文化に触れていくことになるが、その三線教室で現在の夫（Yさん）と出会っている。Yさんは、空港に勤務する公務員で、Pさんと出会った福岡にも転勤で移り住んでいた。

Pさんは、「沖縄に目覚め」たことで、沖縄を魅力的な場所として捉え始め、沖縄の離島を頻繁に訪れるようになる。その過程で、当時の仕事や生活に疑問を抱き始める。Pさんは、福岡で生活していた当時の様子を「なんか全然普通に一人暮らししてて、クーラーきいたところで、夜遅くに帰ってきて、ね。なんか…なんだろ、日にあたらなし、なんか違うなあ、と思って。なんか全然違いますよねえ。なんか違う、と思って」と述べている。また、当時の洋服の販売の仕事に対しても、「生きていく上で、生きるのに、これ（洋服）がホントに重要な、とか。お金とかが、なんかそうじゃない気がしてきた」と述べる。これらの語りには、沖縄を訪れたことをきっかけにして、Pさんが当時の仕事や生活に疑問を抱き始めた様子が端的に現れていると言えるだろう。そして、Pさんは実際に仕事を辞める決意をし、2004年の34歳のときに竹富島の民宿で住み込みをはじめた。アルバイト代ではなく、無償のヘルパーとして働いていた⁽¹⁴⁾。

その後、2006年にYさんと結婚し、PさんはYさんの転勤で伊良部島、そして石垣島へと移り住む。その島での生活を都市での先の語りと比較して、次のように語る。

P：なんか島とか来たら、もう風向きとかも気にするし、大潮とかの時間も気にするし。昔はその時計だったけど、それじゃなく、なんかやっぱ大潮とか、月の満ち欠けとか、すごいそれに合わせて、前よりはねえ。全然、それを気にしながら生きるから、なんかこれがホントじゃないかなあ、とは思うけど。

Pさんは、洋服の販売の仕事に疑問を持ち始めたように、記号（洋服）が意味を持つ消費社会と、時計によって管理されるような近代社会に対して違和感を抱くことで、それらの生活と一線を画すようなライフスタイルへと移行しようとした。それが、大潮や月の満ち欠けを意識する生活への移行であり、Pさんは「なんかこれがホントじゃないかなあ」というように、沖縄での生活の仕方に人間の生き方の本質を見ている。

では、ここでFさんとPさんを移住にかきたてた背景を整理しよう。FさんとPさんは、移住前の生活と移住後の生活が大きく変化しているという特徴があった。それは、都市部における「サラリーマン」のような生活から、農村や離島での生活への転換である。時間の使い方や自然

を意識する感覚が大きく転換し、Pさんにいたっては、そのような生活への転換を強く希求していたと言える。すなわち、FさんとPさんは、生活と生き方そのものを大きく転換する手段として、沖縄への移住を選択したことになる。そして、FさんとPさんの移住の選択が可能になった背景に、都市部での生活からの離脱を強く希求していたことが挙げられる。

3-2. 人生をリセットする

次に、沖縄に移住する以前に、北海道に8年間居住していたJさんを取り上げる。

Jさん（1968年出生、40代、男性）は、東京で生まれ育ち⁽¹⁵⁾、高校を卒業後北海道の大学と大学院に進学する⁽¹⁶⁾。北海道には、沖縄に移り住むまでの約8年間居住していた。Jさんは、北海道でよさこいソーランの立ち上げに関わったことをきっかけにして、沖縄のエイサーを知る。そして、沖縄からある地域の青年会を北海道に招いて、エイサーを習い始める。また、北海道にある琉球民謡協会に入り、三線も習っている。つまり、Jさんは沖縄へ移り住む以前から、沖縄の文化や伝統芸能に強く関わっていたのである。

Jさんは、大学院を修了し、研究生として北海道に残っていた1990年代後半、進路について考え始める。このとき、Jさんは20代の後半になっていた。Jさんは、東京へ戻り就職することを考えた時期もあったが、沖縄のエイサーを「本場で経験したい」という思いを強く抱いていた。そして、Jさんが沖縄へ移り住むことを決断した当時の心境は、次の語りに端的に現れる。

J：（沖縄にずっと住むという気持ちは）最初にはね、なくて。ただそのう、やっぱり来たときに、まあ北海道8年いて、で、もう一度、リセットしたかったんですよ。結構やりたいことやったし、北海道で。大好きだったんだけど、30（歳）になる前に、もう一回、全然何も知らない土地に、行ってみようと思って。まあ、北海道は寒いじゃないですか。そうするとやっぱこう、南国に対する憧れが、結構出てくるんですよね。それがまあ、高まって、エイサーもあったし三線もやったしっていうのもあって沖縄に来て。そのときはそんなに、また次にどっかに行くかもしれないっていう気持ちは（あった）。ただあんまり放浪ばかりしててもしょうがないな。どっかに根は生やしたいな、と思ってて。それが自分の中で沖縄か北海道かわからなかったし。外国かもしれないし、と思ってました。（括弧内は筆者による補足）

Jさんは、北海道の存在を取り上げながら、「もう一度、リセットしたかったんですよ」と述べる。このリセットは、Jさんが「全然何も知らない土地」で新しく生き直すための一つの手段である。沖縄のエイサーを本場で経験したい、という気持ちを強く抱いていたことは事実であるが、沖縄へ移住する直前のJさんを大きく占めていたのは、むしろ人生をリセットしたい、とい

う欲求の方ではなかったか。すなわち、人生をリセットしたいという思いが、20代後半のJさんを沖縄への移住へとかき立てたのである。

そして、Jさんは1998年の28歳のとき、知り合いの協力によって沖縄の会社にアルバイトとして勤務することが決まる。この当時Jさんは「また次にどこかに行くかもしれないという気持ち」を持っていた。すなわち、Jさんは沖縄への移住を人生のリセットの手段として捉えていた一方で、1998年の時点では沖縄に定住する意思は持っていなかったのである。しかし、そのようなJさんは、沖縄へ移住後に沖縄で出会った沖縄出身の女性との結婚を考え始めたことで、次第に沖縄に定住する意思を固めていく。Jさんは「沖縄ってホントに、ここにいるかないかかってものすごい大きいんですよ」と述べ、「どうせ帰っちゃう」という移住者は、沖縄社会で「いまひとつ信用されない」と述べる⁽¹⁷⁾。沖縄の人間関係のあり方を意識したJさんは、放浪することを辞め、沖縄で根を生やしていくことを選択する。すなわち、沖縄への移住を人生をリセットする手段として捉えていたJさんが、沖縄で新しい家族を持つことで、沖縄社会という新しい社会関係を獲得するに至るのである。

以上、本節では、沖縄への移住を生活や生き方を変化させる手段として捉えていた3名の移住者を取り上げた。彼らは、それぞれの生活や生き方を変化させたい、という欲求に突き動かされ、その変化を可能にする手段として沖縄への移住を選択した。すなわち、変化の希求が彼らを沖縄への移住へとかき立てたのである。

4. 沖縄の場所性を固定化する「移住」

次に、沖縄への移住が、結果的に沖縄のイメージや場所性を固定化していくように作用する移住のかたちを見ていく。そして、この沖縄の場所性を固定化する移住が、前説で見てきた変化の希求に基づいて行われる移住と密接に関わっている点についても触れる。

4-1. 非日常としての沖縄

本項では、移住前に度々旅行で沖縄を訪れ、「一度は沖縄で暮らしてみたい」と考えていたBさんとDさんを取り上げる。

関東地方出身のBさん（1982年出生、20代、女性）は、専門学校を卒業後、地元でいくつかアルバイトをしていた。20歳を過ぎたころから年に1、2回程度のペースで沖縄へ旅行に行くようになり、2005年には沖縄にある自動車教習所で免許を取得している。そして、この教習所で出会った沖縄出身（沖縄在住）の現在の恋人と付き合い始める。その後、2006年の23歳のときに、沖縄県中部のホテルで住み込みのアルバイトとして3ヶ月働く。Bさんはホテルの勤務が終了すると、恋人と沖縄県南部で同居生活を始める。調査時は衣料品店で販売員のアルバイトをしていた。

Bさんは、沖縄へ移住することを考え始めた具体的な動機やきっかけについて、「よくわから

ない」とし、何度も沖縄を訪れるうちに「普通に、普通の生活がしたいと思った」と答えている。また、恋人と沖縄で同居生活を始めることについても、結婚を意識した「重い感じ」の決断ではなく、「なんか別に、人生なんとでもなるし。今はやりたいことをちゃんとやっていきたいから」と答えている。すなわち、Bさんの沖縄への移住は、「沖縄で普通の生活がしたい」という素朴な思いに裏打ちされていた。しかし、Bさんに沖縄の魅力を尋ねると、「(沖縄の)風がなんか、好きだなって思う」と明確に答えている。実際、Bさんは旅行で沖縄を訪れた際に、「なんかもう那覇空港着いたときに、(風を感じることで) ああ、沖縄！」という感覚を抱いていたことを明かしている。すなわち、Bさんが旅行者として沖縄を訪れていた当時、上記のような沖縄の風を感じることで、Bさんにとっての沖縄は非日常として理解されていた。

その一方で、沖縄に移住後は、沖縄が日常になっていく葛藤をBさんは経験している。

B：(人生で一度は移住を) やってみたい。でも…お金をとるか、ね。お金が少なくなるじゃん、やっぱり来るってことは、収入が。でもそれよりも、自分の人生を、大事にしようと思って。だから、なんかお金への執着心は、全然なくなった。前よりかはなくなったかなって。でも、モノへの執着心は消えない。// 筆者：あはは。// なんでこんなに物欲が消えないんだろうって。……そこがあたりやっぱ内地だわって。

Bさんは、自分の人生を大事にしようと思う気持ちから、沖縄への移住を選択しているが、上記の語りのように、沖縄での生活では収入が減少することを覚悟したことが明かされている。そして、「お金への執着心」が以前よりは消えたものの、「物欲が消えない」という点に沖縄の日常生活における葛藤が見られる。

しかし、Bさんは沖縄で生活をする中で、非日常の沖縄を感じる努力をしている。それは、旅行者として沖縄を訪れていたときにBさんが感じていた「沖縄の風」を意識的に感じようとする努力である。「なんか普段の生活してて、忘れたくないんですよ、この気持ちを」というように、沖縄での生活が日常になっていく中で、Bさんは非日常の沖縄を意識的に感じようとする努力をする。そのBさんの努力が、日常生活の中で非日常の沖縄を維持すること、さらにはBさんの沖縄での生活を維持することを可能にしているのである。

次に、Bさんと同じ衣料品店で働いているDさんを取り上げよう。Dさん(1978年出生、30代、女性)は、東北地方出身で、関東の短大を卒業したあと、地元に戻り銀行に就職した。Dさんが初めて沖縄を訪れたのは、1998年の20歳のころである。それまでのDさんにとって沖縄は「もう、考えたこともなかったですよ、沖縄って。なんか日本の端くれみたいに思って」いたと答えており、沖縄は気に留めるほどの存在にもなりえなかった。

しかし、Dさんは初めて沖縄を訪れたことをきっかけに、その後、年に2回のペースで沖縄を

訪れるようになる。また、地元にある沖縄料理屋に頻繁に通うようにもなっている。「あ～もうあのころ沖縄ってつくものは、もう何でも、いいから食べたかったし…何でもいいから欲しかったですねえ」というほど、Dさんは沖縄に魅了されていく。そして、DさんにはBさんと同様に沖縄への移住を選択した具体的な理由がなく、「直感だった」と答えている。「好きに理由なんてないって感じですかねえ」と述べており、Dさんは「ちょっとずつお金を貯めていくにつれて、もう目標みたいなのが、沖縄に住む…って夢になっていったんですよね」と語っている。Dさんは銀行を退職して一度転職し、実際に沖縄へ移り住む資金を蓄えていく。また、沖縄へ移り住むことを想定して、手に職をつけようと職業訓練校にも通っている。しかし、2006年の春先に沖縄で仕事が決まりかけたときの様子を、Dさんは非常に消極的な語彙で振り返る。

D：とりあえず、「じゃあこっちにきて面接しましょう」ってことになって。で、まあ面接してダメだったら、もう帰ってくればいいし、それで決まったら決まったら…入ろうかっていうこと。だからねえ…なかば長期で住むっていうのは、あんまり頭になかったです。いつでも帰ろうかな、くらいで。で、面接受けて、採用ってことになって。

沖縄に住むことが「夢になっていった」というDさんは、沖縄で仕事を探し始めるものの、「なかば長期で住む」気持ちはなかったと答える。そして、「いつでも帰ろうかな」と思っていたという。しかし、仕事が採用されたという事実にもむしろ後押しされる形で、Dさんは沖縄への移住を決断することになった。すなわち、Dさんにとって沖縄へ移住することは現実的な選択というよりも、夢であり続ける可能性が高かったのである。つまり、それほどDさんは沖縄に魅了され、沖縄に憧れていたのだと言えよう。

そして、Dさんも、Bさんと同様に、沖縄へ移住後にさまざまな葛藤を経験している。例えば、「金銭的な部分って多いですねえ、沖縄はねえ。どうしても、最低賃金も安いし…」というように、都市部でアルバイトを掛け持ちしなければ生活を維持できないという現実と直面するのである。Dさんは、「やっぱり旅行で来るときってねえ、ホントいい部分しか見えてなかったんだらうなって思いますよ」というように、旅行者として訪れていた沖縄がDさんにとって非日常の空間であったことを明かしている。その非日常が移住後に次第に日常へと変化していく葛藤をDさんも経験することになったのである。それでも、Dさんにとっての沖縄は、「来るべき場所」として捉えられている。沖縄に対する「好きに理由なんてない」という気持ちから、Dさんは沖縄を「来るべき場所」として位置づけ続け、Dさんの中に非日常の沖縄をとどめておくことを可能にしている。

以上、BさんとDさんにとって、沖縄がいかに非日常の空間として成立しているのかを見てきた。Bさんは、沖縄へ移住した後も沖縄の風を意識的に感じることで、非日常の沖縄を感じ

る努力をしている。また、Dさんも沖縄の日常生活に葛藤しながら、「好きに理由なんてない」という気持ちを沖縄に対して持ち続けることで、沖縄での生活を維持している。すなわち、BさんとDさんは、旅行者が感じる非日常の沖縄を^あ^え^て意識することで、沖縄の日常生活を続けることが可能になっているのである。

4-2. 東京と対置される沖縄

次に、東京と沖縄を対極に位置づけるCさんを取り上げる。

Cさん（1967年出生、40代、男性）は、関東地方で生まれ育ち、高校を中退したあと東京でミュージシャンとして活躍していた。1990年代初期にバブルが崩壊した後、Cさんは音楽活動以外にも仕事ももちながら生活していた。そのような状況の中で、Cさんは大学受験の機会に恵まれる。Cさんは大検を取得し、1998年に30歳で大学の経済学部へ進学する。

大学に進学するまで「英語がコンプレックスだった」というCさんは、大学在学中に長期滞在したアメリカである日本人男性と出会い、この男性から大きな影響を受ける。例えば、Cさんはこの男性から「英語勉強するなら、米軍基地に入ったらいじゃん」と言われている。実際、Cさんは沖縄へ移住した数週間後に米軍基地内の仕事に応募し、働き始めている。また、Cさんは大学を卒業して数年後の2004年から2005年にかけて、インドへ4ヶ月間の旅に出ている。そのインドの旅の途中で、体重を測ることを仕事としている人を街で見かけ、Cさんは価値観を大きく転換する。それは、「なんでも自分の持っているものを役に立てて生きていかないと、人生って面白くないんじゃないかなあ」という思いを強く抱くようになるのである。Cさんは大学を卒業後、建設現場で働いていた。そのような状況でインドへ渡ったCさんは、インドでの旅の経験を契機に、生き方を大きく変えることを決断するのである。

Cさんは、「インドで色々、そいつ（アメリカで出会った男性）に言われたこととか考えてて…、沖縄に行けば全部解決するじゃん」と思ったという。Cさんはそれまで一度も沖縄を訪れたことはなかったが、「英語勉強するなら、米軍基地に入ったらいじゃん」という言葉は、大学で経済学を専攻していたCさんの関心を引く沖縄の基地経済の問題など、当時Cさんが向き合おうとしていたいくつかの要素が、沖縄にはすべて揃っているようにCさんには思えたからである。さらに、「自分の持っているものを役に立てて」生きていこうと思うようになっていたことで、Cさんは沖縄では「音楽をもってして生きられる」と考えていた。すなわち、30歳で大学へ進学し、アメリカとインドにおいて長期の旅の経験を経たCさんは、新しい生き方を始めようとしていたのである。その新しい生き方をCさんにもたらしてくれる存在が、沖縄だったのだと言えよう。

では、なぜCさんは突然にも見える沖縄への移住を決断したのだろうか。それは、Cさんが沖縄への移住を「自嘲を込めて」「負け犬の遠吠え移住」と表現していることに、その決断の背景を知る手がかりがある。Cさんは、この負け犬という表現に「いい意味でも悪い意味でも、はじ

かれた人かなあって、東京システムから」という思いを込めている。この「東京システム」というのは、東京で生活をしてきたCさんに実感されていた「お金に関する縛り」に裏付けられているものである。つまり、Cさんは沖縄を東京システムから逃れた場所として認識し、東京と沖縄を対極に位置づけている。すなわち、Cさんが沖縄への移住を選択していった背景には、アメリカやインドでの経験に加えて、東京システムから降りることの切望があった。つまり、「沖縄に行けば全部解決するじゃん」というCさんの思いの裏には、「東京システムから降りた生き方」をとることへの強い願望があったのである。

以上、本節では、非日常の空間として沖縄を位置づけたり、沖縄を東京と対極に位置づけたりすることで、沖縄の場所性を固定化させていった3名の移住者を見てきた。このような沖縄の場所性の固定化は、彼らが沖縄を「特別な場所」として他と差異化することでもある。すなわち、移住者が沖縄の場所性を固定化し続ける限り、沖縄には「特別な場所」であり続けるという一種の不変が期待されている。つまり、前説から見てきたように、沖縄への移住をきっかけにして移住者たちの生活や生き方、さらに自己のあり方が大きく変化する一方で、「沖縄」というその土地や空間には、「変わらない」ことが求められ続けているのである。

5、新しい「移住」のかたち－変化の希求と地方（ローカル）の意味

以上、沖縄へ移住した6名の移住者の語りを引用しながら、1990年代以降の沖縄への移住を検討してきた。

まず、移住者は、生き方の変化を希求することにより、その変化を可能にする手段として、沖縄への移住を捉えていた。ジークムント・バウマンは、近代の現段階を「流動性」や「軽量性」から説明し、固体的（solid）な近代から流体的（liquid）な近代への移行を論じている（Bauman 2000=2001：5-7）。例えば、テクノロジーの発達によって高速移動が可能になると、「空間の移動に、文字通り、『時間がかからない』し、『遠いところ』と『すぐそこ』の差」がなくなっていくという。それによって、流体的な近代では、「価値獲得の手段である時間の効率化は極限をきわめ、（中略）すべての目的において、すべての価値が均等化される」（同上、154）⁽¹⁸⁾。すなわち、流体的な近代は、モノや人の移動が流動的になるだけでなく、生活構造や価値観の変化も容易にすることを意味しているのではないだろうか。実際、本田由紀はポスト近代社会の性質の一つである「産業構造の変化」について、次のように論じている。それは、この構造の変化にともなう「多品種少量生産化は、好みやライフスタイルの多様化をもたらし、さらに経済成長の鈍化や世界的な環境問題の浮上は、直線的で無限の進歩発展という近代社会特有の価値規範を弱める結果を生む」。そして、「それによって、ポスト近代社会に生きる人々は、特定の文化や価値を共有する度合いがすくなくなり、各個人がそれぞれの生き方を選択し、模索せざるをえなくなる」というのである（本田 2008：50-51）。つまり、流体的な近代における生活構造や価値観の変化は、近

代に生きる個人に、生き方の模索という新しい負荷（課題）を与えていると捉えることもできる。しかし、沖縄への移住を選択した移住者は、生き方や価値観の変化をむしろ強く希求していた。すなわち、流体的な近代において、生き方や価値観が多様になるという事実そのものが、アパデュライが述べる横糸の移動への欲求をかきたてていたと考えられる。そして、生き方や価値観の変化を強く希求する人々が、その変化を可能にする手段の一つとして、沖縄への移住を選択していったのである。

しかし、流体的な近代において人の移動や価値観の変化が容易になっている一方で、沖縄への移住者によって沖縄の場所性が固定化されていくという事態が起きていることも事実である。それは、都市－地方というような図式が再強化されるという現象であり、ローランド・ロバートソンのいう、グローカライゼーションの議論である（Robertson 1992=1997）。移住者が生活や生き方の変化を希求する中で前提にされていたのは、「特別な場所」としての「変わらない沖縄」であり、都市と対置された地方（ローカル）である。つまり、変化が希求されるのは、移住者の内面や生き方であって、変化する彼らの受け皿となる環境には不変が期待されていると言えるであろう⁽¹⁹⁾。すなわち、現代の新しい「移住」は、生き方や自己の変化を希求する個人が、再固定化された都市－地方という関係性の中で移動するという事態なのである。

以上より、1990年代以降の沖縄への移住を事例にして見てきた現代の新しい「移住」は、アパデュライが述べていた親族の関係や世代に規定される従来の安定したネットワークとしての縦糸と、流体的な近代において可能になっているグローバルな移動という横糸が、都市と地方の関係性を再編しながら複雑な網目を形成することによって成立しているのである。

引用・参考文献

- 鯉坂学, 2008, 『都市移住者の社会学的研究 『都市同郷団体の研究』の増補改題』, 法律文化社.
- 秋山道宏, 2009, 『『移住ブーム』『観光ブーム』から見える地域・住まい方の変容』, 多田治編, 『2008年度 一橋大学多田治ゼミナール 沖縄・八重山調査報告書 第2巻 観光と環境、文化と自然の社会学～沖縄・八重山諸島のフィールドワークから～』(2009年8月版)(タダオサム・ダイアリー <http://d.hatena.ne.jp/tada8/>よりダウンロード).
- 新崎盛暉, 2005, 『新版沖縄現代史』, 岩波書店.
- Appadurai, Arjun., 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, the University of Minnesota Press. =2004, 門田健一訳・吉見俊哉解説, 『さまよえる近代 グローバル化の文化研究』, 平凡社.
- 蘭由岐子, 1994, 「地方人口の向都離村現象」, 松本通晴編, 1994, 『都市移住の社会学』, 世界思想社.
- Bauman, Zygmunt., 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. =2001, 森田典正訳, 『リキッド・モダニティ 液状化する社会』, 大月書店.
- 同時代社編集部編, 2001, 『沖縄で暮らしてみた』, 同時代社
- Hareven Tamara K., 1982, *Family Time and Industrial Time: The Relationship between the Family and Work in a New England Industrial Community*, Cambridge University Press. =正岡寛司監訳, 2001, 『家族時間と産業時間』 早稲田大学出版会.

- Harvey, David., 1990, *The Condition of Postmodernity*, Blackwell. = 吉原直樹監訳, 1999, 『ポストモダンティ
の条件』, 青木書店.
- 本田由紀, 2008, 『軋む社会』, 双風舎.
- 岩渕功一・多田治・田仲康博編, 2004, 『沖縄に立ちすくむ一大学を越えて深化する知』, せりか書房.
- MacCannell, Dean., 1976[1999], *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, New Edition*, University of
California Press.
- 南川文里, 2005, 「現代社会における見えざる移住者—ロスアンジェルス在住日本人若者層の非合法就労とステイ
タス—」, 『神戸大論叢』第56巻第2号, 神戸市外国語大学研究会.
- 満田久義, 1987, 『村落社会体系論』, ミネルヴァ書房.
- 日本民芸協会編, 1939, 『月刊民藝』第8号(11月号), 日本民芸協会.
- 西里喜行, 1982, 『近代沖縄の寄留商人』, ひるぎ社.
- Robertson Roland, 1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage. = 阿部美哉訳, 1997, 『グロー
バリゼーション 地球文化の社会理論』, 東京大学出版会.
- 酒井千絵, 2000, 「ナショナル・バウンダリーにおける交渉—香港で働く日本人の語りから—」, 『社会学評論』第
51巻第3号, 日本社会学会.
- 島村麻里, 2007, 「アジアへ向かう女たち 日本からの観光」, 『アジア遊学』104号, 勉誠出版.
- 菅康弘, 1999, 「脱都市移住者の群像—'stranger-native interaction' の理解のために—」, 『甲南大学紀要 文学編』
109号, 甲南大学.
- , 2006, 「よそ者であることを〈選択〉する—居住地選択と愛着の位相—」, 『甲南大学紀要 文学編』146号,
甲南大学.
- 須藤直子, 2009, 2008年度琉球大学大学院人文社会科学研究所修士論文「『沖縄へ移り住むこと』の現在—生き方
の問い直しと『沖縄移住』—」, 琉球大学.
- 多田治, 2004, 『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラルスタディーズ』, 東洋経済新報社
- , 2008, 『沖縄イメージを旅する—柳田國男から移住ブームまで』, 中央公論新社
- 多田治編, 2009, 『2008年度 一橋大学多田治ゼミナール 沖縄・八重山調査報告書 第2巻 観光と環境、文化と自然
の社会学—沖縄・八重山諸島のフィールドワークから—』(2009年8月版)(タダオサム・ダイアリー [http://
d.hatenane.jp/tada8/](http://d.hatenane.jp/tada8/) よりダウンロード).
- 同時代社編, 2001, 『沖縄で暮らしてみた』, 同時代社.
- Urry, John., 2000, *Sociology Beyond Societies*, London: Routledge. = 2006, 吉原直樹監訳, 『社会を越える社
会学 移動・環境・シチズンシップ』, 法政大学出版会.
- , 2007, *Mobilities*, Polity Press.
- 山下晋司, 1996, 「〈南〉へ—バリ観光のなかの日本人—」, 青木保他編, 『岩波講座文化人類学7巻 移動の民族
誌』, 岩波書店.
- , 2007, 「出ようかニッポン、行こうかニッポン 現代日本をめぐる国際移動」, 『アジア遊学』104号, 勉
誠出版.
- 吉原直樹, 2008, 『モビリティと場所 21世紀都市空間の転回』, 東京大学出版会.

注

- (1) 外務省領事局政策課『海外在留邦人数調査統計 平成22年速報版』(以後、『平成22年速報版』)によると、
海外在留邦人数は年々増加傾向にある。平成21年(2009年)10月現在の海外在留邦人数は1,131,807人で、そ
のうち33.0%の373,559人が永住者、67.0%の758,248人が長期滞在者である。全体的に長期滞在者の前年比増
加率は鈍化しているが、ここ数年では北米・西欧・大洋州・アジアの永住者数の増加率が上昇していること
が指摘されている。このような永住者の微増の様子を、『平成22年速報版』は「一般的には、国際結婚、定年

後の海外移住などが原因として考えられる」と記述している（外務省領事局政策課 2009：9）。

- (2) ライフスタイル移民については、第2節で詳しく言及する。
- (3) 総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告年報」男女別移動者数、都道府県内移動者数及び都道府県間移動者数の推移－全国（昭和29年～平成21年）より。
- (4) 総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告 平成21年結果」転入超過数の推移－全国、都道府県、19大都市（昭和63年～平成21年）より筆者が作成。この資料による転入者には沖縄県出身のUターン者や、転勤や進学による県外出身者も含まれている。
- (5) 岩渕功一は、1990年代以降の「沖縄ブーム」を、「沖縄の基地問題や歴史問題についてではなく、音楽・食・ツーリズム・生き方などが主流メディアによってもてはやされる、ポピュラー文化・消費文化における」ブームである、と述べている（岩渕 2004：10）。これまでも、沖縄の文化や風土が注目されるという動きはすでにあつた。戦前には、柳田國男や折口信夫、柳宗悦など民俗学者による南島研究がさかんであり、沖縄を訪れた学者たちが、沖縄の民芸や風俗を熱心に記述している（日本民芸協会 1939）。また、沖縄の本土復帰以後の1975年には沖縄海洋博が開催されたことで「沖縄イメージ」が確立し、沖縄を訪れる観光客や沖縄文化の大衆的な消費が「沖縄イメージ」と密接に結びついて進行していく（多田 2004）。しかし、岩渕が述べているように、1990年代以降の「沖縄ブーム」は、よりポピュラー文化や消費文化に特化した現象として立ち現れる。それによって、沖縄における基地問題や歴史的な問題が不問に付され、沖縄と本土の間の溝は逆に深まった、という見方もある（新崎 2005：214）。
- (6) 「沖縄移住」という用語は、1993年に出版された篠原章・宝島編集部編の『ハイサイ沖縄読本』によって初めて公に言及されたと考えられる。その用語の意味の変遷については本稿では詳しく言及しないが、『ハイサイ沖縄読本』の編集に関わったボーダーインク社の新城和博氏は、沖縄ブームを客観的に捉えるための指標として「沖縄移住」という言葉を「わざと」作り出すというねらいがあつたことを明かしている（同時代社編 2001）。
- (7) 1990年代以前から、沖縄県外出身者は沖縄へ移り住んできた。例えば、歴史を遡れば1879年の琉球処分以降、鹿児島県や近畿地方出身の寄留商人と呼ばれる人々が大勢沖縄へ渡り、沖縄の政治・社会に大きな影響を与えてきた（西里 1982：205）。また、戦後のアメリカ統治時代を経て、1972年に沖縄が本土へ復帰したあとには、転勤や進学によって沖縄へ移り住む沖縄県外出身者は一定数存在している。
- (8) Iターンとは、1989年に長野県が打ち出した言葉で、「長野県出身であるか否かにとらわれず『I』の字のように一直線に信州に来てほしい」という思いから、長野県が東京・大阪・名古屋に「Iターン相談室」を設置したことが始まりとされる（菅 2006：5）。
- (9) 本稿で取り上げる6名の移住者の詳細なプロフィールは以下の通りである。

	調査時年齢 出生年	性別	出身地	移住時期	移住時 年齢	現在の 居住地	現在の職業	最終学歴
B	25歳 1982	女性	関東	2006～	23歳	糸満市	衣料品店の 販売員	専門学校
C	40歳 1967	男性	関東	2005～	37歳	沖縄市	基地従業員 (大学院生)	大学
D	30歳 1978	女性	東北	2006～	28歳	那覇市	衣料品店の 販売員	短大
F	41歳 1966	女性	東北	2000～	33歳	今帰仁村	農業 加工品販売	高校

J	40歳 1968	男性	関東	1997～	28歳	那覇市	ダイビング・ サービス	大学院
P	38歳 1970	女性	九州	2004～8 ヵ月 2006～	34歳	石垣市	主婦	短大

- (10) 1960年代から70年代のアメリカにおいて、都市から農村へという逆流の移動パターンが出現している。これは、ネオ・ルーラリズムと称される。ネオ・ルーラリズムとは、満田久義によれば「都会人が新しいライフ・スタイルを求めて、大都市とはかけ離れた田園へ移住」することであり、「超産業化社会に現れる生活様式」である（満田 1987：242-243）。このような移動パターンは「就業機会をめざす農村から都市への移動パターン（『生産型』人口移動）から、環境アメニティや新しいライフスタイルをめざす都市から農村への移動パターン（『消費型』人口移動）への転換である」（同上、232）。
- (11) 山下晋司は、バリ観光を繰り返すうちに、バリ人男性と結婚する日本人女性を取り上げている。山下によれば、バリへ移り住む女性たちの多くは「日本国籍を捨て、インドネシア国籍を取得する意志をもっておらず、かつての移民のような『国を捨ててきた』という意識は強くない」（山下 1996：55）。「彼女らは、二つの国にまたがって生きようとしており、彼女らにとって『旅すること』（travelling）と『住むこと』（dwelling）の距離はそれほど大きくない」という（同上、56）。つまり、このような旅と移り住むことの境界の曖昧さは、沖縄への移住を観光と移住のつながりから捉える多田や秋山の視角と同様である。すなわち、観光地を居住地として位置付け直すことがバリに滞在する日本人によってもたらされている。さらに、ライフスタイル移民は中高年女性や定年退職者のみに見られる動きではない。例えば、南川文里によれば、アメリカのロスアンゼルスにおける日本人若者層の滞在は、「収支計算に裏付けられた具体的な長期計画というよりは、『憧れ』や『やりたいこと』といった漠然として曖昧な言説」で特徴づけられ、「具体的な目標を達成することよりも、『渡米』や『滞在』という行為自体が目的であるように聞こえる」という（南川 2005：123-124）。そして、アメリカでの滞在は自己実現や主観的な「変身」の機会として日本人の若者たちに位置づけられている（同上、125-127）。
- (12) 日本においても、1960年代から70年代にかけて、アメリカと同様に都市から農村へという移動パターンが存在したが、この動向は当時の学生運動におけるカウンターカルチャーという文脈の中に位置づけられた（菅 1999）。その後、自発的に都市から農村へ移り住むという動向は、「カントリーライフ」や「新・田舎人」、そして1989年に登場したIターンという用語へと変遷していく（同上、142-147）。
- (13) これまで〈田舎〉のイメージは、ノスタルジアという「かつてあった」「失われたもの」と、オーセンティシティという「真正」という二枚看板で語られており、近代の観光のモチーフと密接に結びついてきた（菅 2006：7-9）。しかし、実際にIターンをした人たちは、極めて悲哀の語り口や消滅の語り（「都市は砂漠だ」など）に傾斜することが多く、これまでの〈田舎〉イメージが必ずしもIターンの動機を言い当てているわけではない、と菅は述べる。Iターンを「地方の小さな集落への移住」として追いかけてすぎると、「考察はありきたりな地平に収束してしまいやすく」、〈田舎〉言説は「人間としての、地域としての、そして〈住む〉ということへのポジティブな実践やその契機・可能性の発見に対しては阻害要因となる」ため、これまでの〈田舎〉言説には限界があるのである（同上、2006：8）。
- (14) Pさんは竹富島で生活を始めたあとに、九州で暮らす母親に病気が見つかり、8ヵ月で地元へ戻ることになった。
- (15) 東京で生まれ育ったJさんであるが、1969年の1歳のころに、父親の仕事の都合で沖縄県的那覇市に1年間居住していたという経験を持つ。東京に戻ってきてからも、Jさんの家庭では沖縄の話題は日常的に上っていた。しかし、Jさんは大学生になるまで再び沖縄を訪れることは一度もなかった。
- (16) Jさんは大学院で環境科学を専攻し、修士課程の2年間はインドネシアで頻繁に調査を行っていた。また、学生時代はインドやメキシコなどの海外旅行をはじめ、沖縄の離島にも旅行で訪れており、各地を旅するこ

とに慣れていた。そのため、Jさんは学生時代の自分を「放浪ばかりしていた」と表現する。

- (17) Jさんは、「嫁さんの親戚は、できるだけ内地の人とは結婚してほしくないって、お母さんもそうやって思っ」いたと述べている。
- (18) ハードからソフトへと移行した近代において、時間と空間の概念が大きく変化しているというバウマンの指摘は、デヴィット・ハーヴェイによる「時間と空間の圧縮」の議論と類似している (Harvey 1990=1999)。さまざまな生産技術の高度化によって、生産時間が短縮されていくような時代は、商品生産の即時性と使い捨ての価値観が強調され、それは「価値観、ライフスタイル、安定した結びつき、そして物、場所、人々、広く受け入れられてきた行動と存在の様式への愛着が使い捨てになる」ような時代である (同上、366-367)。つまり、高度なテクノロジーが発達したソフトフェアの時代には、固定的な空間への執着が意味をなさなくなると同時に、価値観やライフスタイルも容易に変化し、「取り換えのきくもの」になっていると言える。
- (19) 都市と地方の関係性の再固定化は同様に日本におけるUターンやIターン政策が前提にする地方の位置づけ方にも見られる。47都道府県のホームページを参照してみると、東京、大阪、福岡の3都県を除いた44道府県が「移住」「定住」「二地域居住」「田舎暮らし」「ふるさと」などをキーワードに、UターンやIターンの政策を行っている。それらの政策の主な目的は、特に過疎が進んだ地域の地域活性化であり、他県から移住者を募ることで県や市町村を復興させようとするねらいがある。キーワードからもわかるように、Iターンを対象にした政策にも「ふるさと」や「山村回帰」という用語が使われ、都市と対置された地方の特色が政策の全面に押し出されている。